

グローバルな環境で育てたチームスピリッツ

—海外探検隊第5期生シンガポールチームの挑戦—

Team Spirits Under Global Environment:

The Challenges of TANKENTAI Singapore the 5th Batch

東京海洋大学海洋政策文化学科1年 田辺 傑作

TANABE Kessaku

(Freshman, Department of marine policy and culture,
Tokyo University of Marine Science and Technology)

キーワード：グローバル化、多様性、海外留学

1 海外探検隊とは

私は今回、東京海洋大学の海外派遣キャリア演習Ⅰ、通称「海外探検隊」で本年8月8日から9月1日までの間、シンガポールへ渡航した。このプログラムは東京海洋大学海洋科学部の学生ならば、一定の条件を満たすことで誰でも参加する事が出来る。本プログラムは夏と冬の2回あり、アジア各国へそれぞれで4人程度のチームが編制され、派遣されるというものである。今回で5回目となるこのプログラムは、当初は単位認定されていなかったが、現在は正規の科目となっており、しかも今回は夏プログラムであっても入学したばかりの1年生の参加が可能ということもあって、私は矢も楯もたまらず応募した。いくつかの面接を経て、私が希望したシンガポールへ派遣が決まった時は本当に嬉しく、これからどんな数カ月が待っているのかと胸が躍った。

2 事前研修から渡航へ

2.1 チームメンバーとの出会い

派遣先が決まったという連絡が入り、第1回のオリエンテーションが開かれた。案内された席に座り神妙な面持ちで座っていると、何人かの学生が着席していった。そんななか、私の周りにもついにチームメンバーが現れた。とは言え学内でも一度も顔を合わせたことの無い初対面同士である。お互いにとっても緊張し、殆ど会話をする事なくシンガポールチーム結成1日目が終わった。ま

だこの時(この時点では5月)は、このメンバーで数カ月後に本当にシンガポールへ行くということへの実感はなかなか湧かなかった。しかし、このスタートをきっかけにシンガポールチームの絆は一気に加速していくこととなる。



図 2.1 今回のチームメンバー
(向かって左から KAI, 筆者, SAKIKO, RYUICHI)

2.2 怒涛の事前研修

それというのも、この日から間もなく、渡航直前まで続く事前研修が始まったからである。この事前研修の内容は様々であるが、本稿では特に(チームの結束にも深く関わることとなった)プレゼンテーション研修について述べたいと思う。この研修は、コンサルティングファームから講師を迎え、本プログラムの最後に英語で行う2時間に及ぶ成果報告会プレゼンテーションの準備として、プレゼンテーションスキルを磨くことが目的であった。この研修の中で最初に課された課題は、準備期間1週間で「各国チームの自己紹介」の10分間プレゼンテーションを行うというものだった。私は今回のシンガポールチームではリーダーを任されたが、そのリーダーとしての一番初めの仕事がこのプレゼンテーションであった。まだ顔もはっきりと覚えていないメンバー同士、何をどの様な形で行うか非常に頭を悩ませた。実際、集合して作業を行うにも学科や学年も違う者同士がまとまって集まれる時間を確保することは至難の業だった。そこで、私はオンラインストレージを利用しそれぞれの発表分担を決めながら、皆が自分の時間で作業した物を適宜全員が確認出来る場所へアップロードし、進捗確認していくという方式を採用した。この方式が完全に機能した訳ではなかったものの、第1回目の発表としてはまずまずの感触であったし、メンバーもお互いの目標を明確に共有することが出来て、大変有意義だった。

次の課題は準備期間1カ月で「シンガポールについて」という15分間の英語プレゼンテーションをまとめるというものだった。この英語プレゼンテーションをまとめるに当たり、まずは日本語でプレゼンテーションの原稿を作成し発表した。発表内容は、それぞれがシンガポールについて興味を持ったことを発表していくといったスタイルだったが、ここでの私の仕事は各メンバーの発表内容に通底したテーマを探り出し、全体として聴衆が「何に基づき私達が話しているのか」を見失わないよう構成を考えることだった。幸いなことに私達のチームはこの日本語版プレゼンテーションはあっさりとは終わることが出来たが、他のチームではメンバースケジュールの関係でなかなか進捗が思うようにいかなかったり、この頃になると渡航も目前に迫っているチームもあ

ったりといったなかで皆一回一回の研修を必死に乗り越えようと懸命に頑張っていた。そして迎えた15分間の英語プレゼンテーションでは、渡航に同行する本学教員や本学でグローバル教育に携わっておられる教授などにも多数ご出席頂き、各国メンバーの緊張は最高潮となっていた。私を含め、多くの学生にとって初めての英語プレゼンテーションであり、それまで懸命に覚えた文章はあっという間に雲散霧消していった。しかしながら、ここで「とにかく伝えるんだ」という強い意志を持ち奮起し、メンバー全員が最後までやり遂げられたことは、間違いなくチームの大きな財産となった。この苦しいプレゼンテーションを終えた直後に、綺麗なバインダーに包まれた海外探検隊第5期生の渡航プログラムを渡された時の感動は決して忘れることの出来ない思い出である。ここからついに私達の探検隊が始まると思うと、胸が熱くなった。

この様な研修の他にも、私達は社会人との名刺の交換方法やメールの書き方を勉強するビジネスマナー研修や、中国語や中華圏の文化を学ぶ研修等を受け、またその間にパスポートの取得や海外旅行保険の申請、現地滞在先への滞在費振り込み等もあり、あっという間に渡航の日を迎えた。

3 シンガポールでの1カ月

3.1 SG50

そして迎えた旅立ちの日、私達は胸に様々な思いを抱きながら日本を後にした。シンガポール生活の最初の1週間程は担当教授と職員と共に過ごした。奇しくも私達がシンガポールへ降り立ったまさに次の日がシンガポールの建国50周年記念日である“SG50”であった。この国家的なイベントは日本円にして延べ300億円以上も国家予算が投入されており、町のあちこちにSG50のロゴマークを見つけることが出来た。加えて、この日はMRT(Mass Rapid Transit: シンガポールの鉄道)も全線無料となっておりどこもかしこも多くの人で賑わっていた。また、道行く人の多くは赤い服を着用していたことも印象深かった。このナショナルデーの最後にはマリナーベイサンズエリアで花火の打ち上げがあった。人込みの間を縫うように場所を必死に確保し見た花火はとても大きく、それを見ているシンガポール人の瞳の中には様々な思いが詰まっているように見えた。しかし、ここからが日本と大きく異なる点で、忙しいシンガポール人は花火が終わるや否やあっという間に皆一



図 3.1 SG50 での人々の様子

ちが日本と大きく異なる点で、忙しいシンガポール人は花火が終わるや否やあっという間に皆一

齊に帰り始めたのである。これが日本ならば皆思い思いに余韻を楽しむようなものであるが、日本との国民性の違いを垣間見ることが出来て大変興味深かった。しかし、このナショナルデーのまさに次の日、ジョホール・バルにて事件は起きた。

3.2 ジョホール・バルでの事件



図 3.2 ジョホール・バルから見たシンガポール
(向かって左がマレーシア、右がシンガポール)

シンガポールとマレーシアの国境は陸続きであり、一本の橋で結ばれている。我が国は島国であり他国とは完全に分断されているため、私達には陸路での国境越えがどのようなものか全く想像もつかなかった。そこで、SG50 の次の日に私達はこの陸路での国境越えをするべく、ジョホール・バルへ渡ったのである。ところがここで一つの問題が発生した。私達の隊には一人中国人留学生在いたが、彼女がマレーシアに入国出来ないというのである。このジョホール・バルへ渡るということについて中国人である彼女は我々日本人と手続きが異なるため、様々な書類の取得等について関係各所へ確認を何重にも取り進めていたものの、実は、彼女が取っていた手続きはもう一本のルートのみで有効な手段であり、今回私達が取ったルートからではマレーシアへ入国出来ないというのである。これについては、かなり食い下がったものの結果は変わらず、彼女は国境を跨いで私達と分断されてしまった。この一件について、私達は国籍というものを普段殆ど認識せずに暮らすことができてしまっているが、それはとても甘い考えであり、いかに恵まれた環境なのかということに嫌と言うほど思い知った。初めて会った時から彼女はいつも天真爛漫にチームを支えてくれていて、私達と何も変わらないと思っていた。そんな私達に突如突き付けられた現実に、胸が締め付けられた。ジョホール・バルでのプログラムを終え、SG50 の次の日で連休の最終日だったために猛烈に混雑するなかを抜けてシンガポールへ帰った時はもう夜の 8 時になっていた。たった 2 km の橋を通過するのに実に 2 時間もかかったが、滞在先で全てのチームメンバーが合流出来た時には涙がこぼれそうになった。

3.3 リーダーとしての仕事

この様なトラブルに見舞われながらも、私達は互いに支え合い、励まし合いながら一日一日を

大切に過ごしていった。最初は、例えば MRT (Mass Rapid Transit: シンガポールの鉄道) の乗り方も分からなければ、日本に比べ途轍もなく速いシンガポールのエスカレーターに転びそうになり、宗教上の理由でトイレに備え付けられているシャワーの飛沫が隣の個室から飛んでくることに吃驚したりもしたが、ちょうどその様な生活の違いにも慣れた頃、私達をそれまでサポートしてくれていた担当教授と職員の方が帰国する日がやってきた。担当教授と過ごした最後の夜は、これからの不安と期待が入り交じり名残惜しくはあったが、ここから私達が作る探検隊が始まることにその晩はなかなか寝付くことが出来なかった。私達だけとなったシンガポールで、最初に行わなければならなかったのはプレゼンテーションの資料作りだった。既にここまでいくつかの企業や商工会議所へ訪問しており、最終成果報告会に向けてこの部分の資料は作成しておかなければならなかった。他方で、私達はこれら訪問先へお礼のメールや、日本へ向けて毎日の日報を書くことを義務付けられていたのだが、ここで特に中国人留学生は、慣れない日本語の文章を他のメンバーが添削していたことも相まって、睡眠時間は非常に短くなっていた。ある程度は仕方がないとは言え、この様な状況のなかでプレゼンテーションの打ち合わせを行っても全くうまくいかず、そこで私はリーダーとしてチームメンバーに昼の3時まで睡眠を取ってもらうことにした。この提案には慢性的な睡眠不足に苛まれていたメンバーからも歓喜の声があがった。きちんとまとまった睡眠を取ったことが奏功し、一日の終わりには予定していた箇所まで作成を進めることができた。この様にメンバーの体調をしっかりと見て、活動時間と休憩時間の効果的な配分を行うことの重要性を痛感した一日となった。

3.4 印象的だった出来事

この他にも私達は様々なプロジェクトを一つずつ乗り越えていった訳だが、紙幅の関係上全てを記載することが困難なため、いくつかの最も印象深かったエピソードを取り上げる。

一つ目は、日本科学技術振興機構シンガポール事務局と共同で行った「JST プロジェクト」内のことである。このプロジェクトでは JST のこれからの事業に関係する可能性があるとして、シンガポールでの機能性食品の現状を調査した。そのなかで様々な年齢や性別のシンガポール人に対して路上や店側の了解は取った上でスーパーマーケットの店内の買い物客に対してインタビューを行った。最初のうちはこちらのたどたどしい英語に対して買い物客からは訝しがられてしまい、なかなか会話まで辿りつくことが出来ず、メンバーのなかには心が折れそうになった者がいた。事実、私達の英語はシンガポールで使われているシングリッシュとも異なるし、彼らからすれば、いきなり自称日本人大学生が片言の英語で「調査をさせてくれ」とメモを持ち前かがみで聞いてきても怪しむのは当然である。そこで、話しかける対象、会話の導入部分や話し方、こちらの姿勢や相手の心理状態に応じて相槌の打ち方を変えるなどの工夫を行ったことで劇的に回答

率を上げることが出来た。これらはインタビューチームを二人編制にし、一人が話している間にもう一人はパートナーと対象者のやり取りを分析するという手法を取ったことが結果として上手く機能したためと考えている。

もう一つのエピソードはシンガポール国立大学の TMSI (熱帯海洋科学研究所) における一週間のインターンシップの中の出来事である。このインターンシップの中で私達はフィールドワークの一環としてシュノーケリングを行った。しかし、ここである問題が発生した。私達チームの中国人留学生が泳ぐことが出来な



図 3.4 初めてのシュノーケリング後、帰りの船内

いところか泳ぐことがどういうことなのか分からない、況や海に一度も入ったことが無いと言うのである。私達日本人は小学校からずっと授業のなかで水泳を学習してきたが、それは日本のなかの常識であって、彼女の生まれ育った中国の東北地方では水泳の授業がなかったということに衝撃を受けた。彼女は入水することを非常に躊躇っており、ライフジャケットを着込んで絶対に沈まないという状況だと頭では理解しても、それまで全く味わったことのない経験にどうしてよいか分からずパニックに陥ってしまった。その他のメンバーは皆一通り水泳能力があったため、皆で彼女を支えながらのシュノーケリングとなった。そして彼女は徐々に水に慣れてきたことで、少しずつ水中で足を動かすことが出来るようになり、ついにゆっくりではあるが泳ぐことが出来たのだ。彼女の人生の中で初めての体験であり、このことは帰国前までの語り草となっていた。

3.5 最終成果報告会



図 3.5-1 最終成果報告会でのプレゼンテーション

そして、ついにその日はやってきた。6つのプロジェクトの集大成をそれまでシンガポールでお世話になった方々へ2時間にわたって発表する最終成果報告会が8月31日に行われた。この日を前に、日本より東京海洋大学から私達のために多数の教職員の方々が駆けつけて下さった。フィードバックを貰いながらプレゼンテーションの資料を朝から深夜まで何度も

何度も練り直し、迎えた当日、不思議と緊張は無かった。何故ならば、そこで発表するのは全て私達がシンガポールで経験してきたことのほんのエッセンスであり、多くの伝えたいことを凝縮し、絞り込み、更に凝縮を重ねたものだったからである。事実、英語の原稿は全く作らずにプレゼンテーションに臨んだが、自然と次から次へ言葉が口から溢れた。当初の予定に比べて多少の進行ミスはあったものの、瞬く間にプレゼンテーションは最後の3分間スピーチを迎えた。このスピーチでは私達のシンガポール生活の総括を3分間で述べるというもので、皆が思い思いの文を打ち明け、そして参列者の方々も時折目を赤く腫らして聞き入っていた。私の前の3人が終わり、いよいよ私の番である。ところが何を話してよいのか分からない。時間にし



図 3.5-2 最後の3分間スピーチ

てほんの数秒の間、私はしばし固まってしまった。事前研修から含めて数カ月、シンガポールへ来て1カ月、互いに衝突しながらも時に笑い合い、苦悩し合い、そして多くの人達に支えられ、見守られ、その様なある種混沌とした感情に押しつぶされ言葉が出ない。もはや何を言ったかさえ殆ど覚えていないが、最後に”That’s all. Sorry, I can’t speak anymore.”と言って座り込んでしまった。この瞬間会場は静寂に包まれ、会の進行は完全に止まってしまった。その時である。中国人留学生の彼女が突如、完全に予定に無いことだったが私達(他のメンバー3人)はリーダーへ伝えなければならないことがある、とスピーチを始めたのだ。このスピーチは完全に原稿の無い彼女から私への感謝のスピーチだった。私はこれを聞いているうちに、徐々に私を取り戻し、会の締めくくりとなる最後のスライドショーを始めることが出来た。スライドショーが終わった時、会場は暖かく、大きな拍手に包まれ、この一カ月の全てが洗い流されていくような感覚を味わった。この瞬間決して楽なことばかりではなかったが、この大学に入り、様々な出会いを経て海外探検隊に参加して本当に良かったと心から思えた。



図 3.5-3 出会いという最高の宝物

4 おわりに

私の体験談は以上となるが、この探検隊を通し出会った3人の仲間に感謝したい。本稿ではそのなかの一名に焦点を当てた形にはなったが、誰一人が欠けても最後までやり切ることが出来なかった。本稿では書ききれなかった様々なことは今後違う方法でも発信していきたいと思う。そして最後に私達の探検隊を作り上げ、また今回どこまでも力強く私達をサポートして下さった小松俊明教授にも衷心より感謝申し上げたい。

この記事に関するご意見やご感想等は下記メールアドレスまで

s154027@kaiyodai.ac.jp

* 本記事については、本マガジン『留学交流』8月号にも下記の関連記事が掲載されていますので、ご参照ください。

【事例紹介】

グローバル体験以上の成果を持ち帰るには

-東京海洋大学海外探検隊の戦略的な海外派遣について-

東京海洋大学グローバル人材育成推進室教授 小松 俊明

(<http://www.jasso.go.jp/about/documents/201508komatsu.pdf>)